

兵庫津遺跡第57次調査 - 兵庫城跡の調査 -

◆ 兵庫津遺跡について ◆

兵庫津遺跡は、現在の兵庫区南東海岸部に位置し、南北約2 km、東西約1 kmの範囲が想定されています。これまでの56次におよぶ発掘調査の結果、港湾都市として栄えた江戸時代の町屋跡や寺院跡が見つかり、当時の人々のくらしぶりが少しずつわかってきました。

兵庫津の港としての歴史は古く、奈良時代の大輪田泊までさかのぼります。平安時代後期には、平清盛が日宋貿易の拠点として整備したことも知られています。戦国時代に入ると、商業的な面だけでなく、軍事的な面でも重視されるようになります。天正8(1580)年には、天下統一をめざす織田信長方の池田恒興(つねおき)らに攻撃され、花熊城の落城とともに兵庫津もその一部を焼失しました。その直後、池田恒興により、現在の中央市場跡地付近に兵庫城が築かれます。その際、花熊城を解体した材料を使用したとの記録があります(『花熊落城記』1732年)。

兵庫城は、江戸時代に入ると尼崎藩の支庁である兵庫陣屋になります。そして、兵庫津の町は、この陣屋を中心に、およそ2万人が暮らす港湾都市として発展しました。

その後、明和6(1769)年以降は幕府の直轄領となり、大坂町奉行所の出先機関として勤番所が置かれます。明治時代には兵庫県庁が置かれ、兵庫県発祥の地となりました。第35次調査では、城の北西隅を調査し、勤番所時代の石垣を確認しています。

今回の調査では、はじめて築城当初(天正期)の石垣を確認することができました。天正期に築造された城の石垣が、後世の補修や改築を受けることなく地中に保存され、発掘調査によって発見されたことは類例がきわめて少なく、大変意義深いことです。



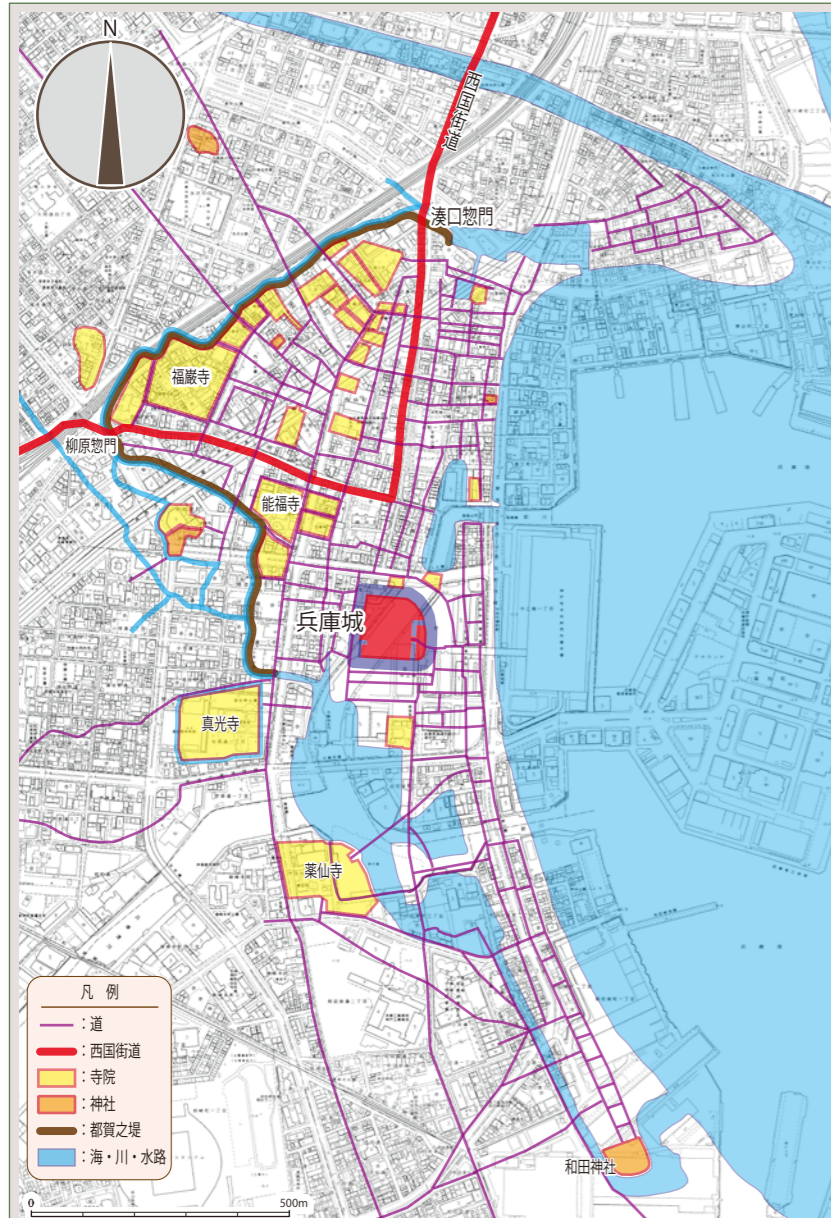
初代城主 池田恒興
(大阪城天守閣所蔵)



兵庫津遺跡 - 兵庫城跡 - 発掘調査地点位置図



兵庫津遺跡 - 兵庫城跡 - (旧中央卸売市場本場) の位置



現在の地図と元禄絵図の合成図

元禄9（1696）年に兵庫津奉行が尼崎藩に提出した「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」を、現存する寺院などを基準に、現在の地図と重ね合わせました。これにより兵庫城の位置も、推定することができます。



K区 石垣

本丸の北東隅、城内側の石垣の最下段。城外側の石垣は後世の造り替えで確認できませんでしたが、堀幅は9m（五間）と考えられます。



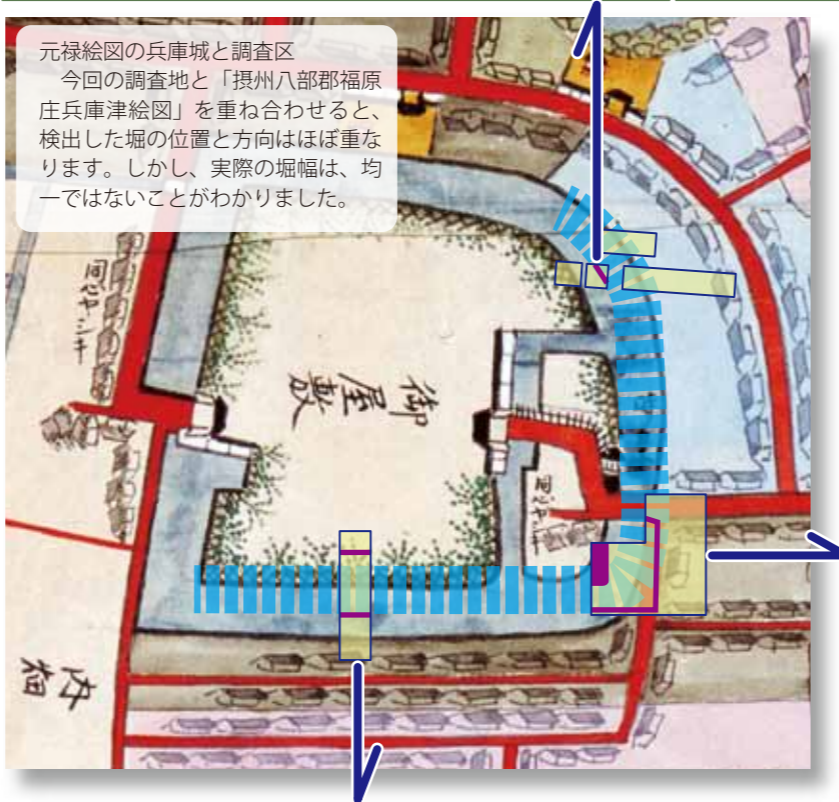
F区 全景（北西から撮影）

堀の南東隅の石垣。東城外側の石垣はよく残っていて、現存する高さは1mです。堀幅は14.6m（八間）で、堀の底には粘土が堆積していることから、水濠であったと考えられます。



F区 多用された転用石

自然石を使用した野面積（のづらづみ）と呼ばれる工法です。転用石の中には、「文亀四年月日」（1504年）と刻字された石造品が含まれています。



元禄絵図の兵庫城と調査区

今回の調査地と「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」を重ね合わせると、検出した堀の位置と方向はほぼ重なります。しかし、実際の堀幅は、均一ではないことがわかりました。



F区 馬出の二重石垣（根石）

馬出の石垣の下部構造には、沈下防止のための胴木ではなく、据付の溝と粘土の充填のみ施されています。



F区 石垣の裏込め石

天正期以降の石垣に比べて、裏込めである栗石（ぐりいし）の奥行きが狭いのが特徴の一つです。栗石には、一石五輪塔などを壊して、利用したものが多く含まれています。



鋳鉄管

中央市場の道路下に、古い水道管が埋設されていました。鋳鉄管には「1898 DYS&Co」と神戸市の水道のマークである「六剣水」が鋳込まれています。明治31（1898）年に、神戸市がイギリスのD・Yステュワート社に発注して製作されたものです。



I区 城内側石垣

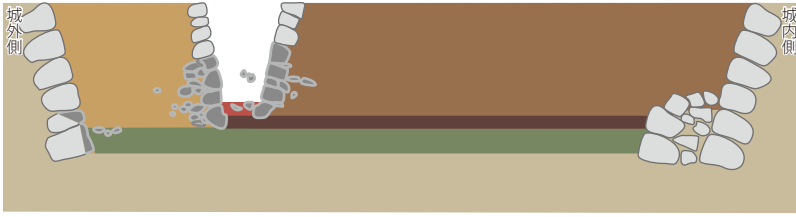
本丸の南、城内側の石垣。五輪塔や宝篋印塔などの転用石が多く利用されていることも、天正期の石垣の特徴です。堀幅は、18m（十間）です。



I区 城外側石垣

本丸の南、城外側の石垣。積み上げ角度が垂直に近く、石垣に隙間が多いことから、築造当初の石垣ではなく、後世の積み直しと考えられます。

発掘調査（F区）で確認された堀の変遷模式図



天正期から幕末に至るまでの堀の断面模式図

堀の平面模式図

下図の変遷は、18世紀中頃から後半にかけて、短期間のうちにおこった出来事です。



天正 8 (1580) 年の築造当初の堀は、幅 14.4m (8 間) で、軍事上十分に機能し得る堀でした。



幕府の直轄領（上知令 1769 年）となって以降、城外側石垣の内側に、町割りと方向を合わせるように石垣が新たに設置され、堀は埋め立てられ、その幅は 10.8m (6 間) になりました。



堀は完全に埋め立てられ、新たに切り石の石垣を設置し、幅 1m ほどの水路になりました。堀の名残をとどめながらも、街の区画溝となりました。

＝ 兵庫城 年表 ＝

年号	西暦	出来事
天正 8	1580	池田恒興が築城。荒木村重の花熊城を解体し、その材料を使用したとの記録がある（『花熊落城記』1732 年）。
天正 11	1583	池田恒興、美濃へ転封。 兵庫と尼崎が三好（豊臣）秀次に与えられる。
天正 13	1585	羽柴秀吉の直轄領となる。 片桐且元が代官となり、「片桐陣屋」と呼ばれる。
慶長元	1596	慶長伏見地震。兵庫津も被害を受ける。
元和 3	1617	尼崎藩領となる。 「兵庫陣屋」おかれ、奉行が駐在する。
元禄 9	1696	『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』が描かれる。 「兵庫陣屋」は、「御屋敷」と表現される。
明和 6	1769	幕府直轄領となり、「勤番所」が置かれる。 上知（あげち）以降、堀が埋められ町屋となる。
文久 2	1862	『兵庫津之圖』が描かれる。 「御番所」の周りも町屋となっている。
明治元	1868	兵庫県庁が置かれる。4ヶ月で移転する。
明治 7	1874	新川運河開削により、中心部の大半が削られる。



摂州八部郡福原庄兵庫津絵圖 元禄 9 (1696) 年
(個人蔵、神戸市立博物館寄託)

兵庫津奉行が尼崎藩に提出した絵図で、兵庫津の町の様子が詳しく描かれています。



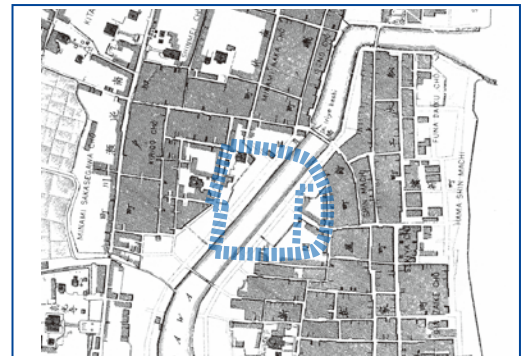
兵庫陣屋絵圖 江戸時代後期 (神戸市立博物館蔵)

明和 6 (1769) 年、幕府の直轄地となって以降、兵庫陣屋の堀は埋め立てられ、町屋になっていく様子が記録されています。記述によると、堀幅は 4～6 間までばらつきが見られます。



兵庫津之圖 文久 2 (1862) 年 (早稲田大学図書館蔵)

堀は完全に埋め立てられ、その名残のように町割りの水路として残っています。御番所（勤番所）の周りも町屋になっています。



兵庫神戸実測図 明治 14 (1881) 年

明治 7 年に開削された新川運河が、兵庫城跡の中央を斜めに切り裂いています。検出した新しい石組み水路は、この地図の街区と一致しています。

今回の発掘調査および現地説明会の開催にあたっては、神戸市産業振興局中央卸売市場本場、一般財団法人神戸市都市整備公社のご協力を得ました。